

先月6日、四万十町大正の轟公園内に学習研修施設『四万十ヤイロチョウの森ネイチャーセンター』がオープンした。森林トラストによる自然保護に取り組む公益社団法人「生態系トラスト協会」(中村滝男会長)が個人からの寄附と町から土地の無償提供を受けて建設したもの。会長の中村さんに話を聞いた。



幻の鳥・ヤイロ鳥とトラスト活動

みなさんはヤイロ鳥という鳥をご存じだろうか。学名は「ピタ・ブラキウラ・ニンファ ～短い尾の水の妖精のような小鳥」。国や高知県の絶滅危惧種に指定され、高知県の文化財・県の鳥・四万十町の鳥になっている。ヤイロ鳥は渡り鳥で、毎年5月頃南方から九州・四国にやってくる。その羽は緑、コバルトブルー、赤、白、黒、茶など、さまざまな原色に彩られている。「八色鳥(やいろちょう)」という名はこれに由来する。だが、その姿を見たことのある人は地元でも稀で、「ポポピー」という独特の声はすれども姿は見えず。ゆえに「幻の鳥」ともいわれる。



今を去ること約50年前、図鑑で見た「幻の鳥・ヤイロ鳥」に魅せられた少年がいた。「幻の鳥に会ってみたい。」中学生の中村滝男さん、その人である。山口県で育った中村さんだが、大学進学を機に高知へやってきた。もちろん、ヤイロ鳥に会う夢をかなえるためである。(ちなみに、この夢が実現するまでに25年かかったそうだ。)

1993年、ヤイロ鳥の住む四万十の森が開発の危機にさらされる。県鳥なのにヤイロ鳥の保護区はない。中村さんはヤイロ鳥のための土地を作るべく、トラスト運動を始めた。生態系トラスト協会の誕生である。

確かにヤイロ鳥は美しい鳥である。しかしそれだけで広大な面積の山林を人為的に用意してまで保護すべきものなのかどうか。それについてはこういう答えが返ってきた。

ヤイロ鳥の餌の90パーセント以上はミミズです。もちろん餌のたくさんいるところにヤイロ鳥は来るわけですが、四万十川流域は日本でヤイロ鳥の生息密度が濃い場所です。ここのミミズを調べると、シーボルトミミズ(高知でいうカンタロウ)の仲間だけで10種類もいて、全部合わせたら30種類くらいのミミズがその森にいる。ミミズを食べて生きているのはヤイロ鳥だけではありません。タヌキもアナグマもイノシシも、いろんな生きものがミミズにその生を支えられている。だから、ヤイロチョウがいる森というのはその地域で1番豊かな生態系、1番生物多様性に富んだいい森だといえる。ヤイロチョウが来る森というのは胸を張れるわけですよ。

余談になるが、今年の四万十はヤイロ鳥の繁殖が少なかった。主食であるカンタロウミミズが極端に少なかったことが一因と考えられるが、どうやらカンタロウには種ごとに2年とか3年とかいう違った繁殖周期で発生の多寡があり、その少ない周期の重なった年(=カンタロウの大不作)が今年らしいことが分かってきた。

まだまだ自然界は分からないことだらけである。



YAIRO-DANCE

幻の鳥だけに、ヤイロ鳥の生態もよく分かっていないことが多い。「大きな前進は、サルが天敵だと分かったこと。だから、サルの天敵であるクマタカがいるところならヤイロ鳥は繁殖できる。また、サルに似た姿をした我々はサルと違う姿になれば警戒心の強いヤイロ鳥に近づける可能性がでてくる。いつまでも幻の鳥じゃいけない。生態を学んでヤイロ鳥が身近な鳥になるようにしていかななくてはならないと思っています。」

さらにもう一つ、最近になって分かったことがある。それは、ヤイロ鳥が求愛のダンスをするということだ。中村さんはその動きをもとに歌詞を作り、曲と振りをつけてもらってヤイロ鳥ダンスを創った。子供たちにヤイロ鳥の生態を楽しみながら知ってもらうためだ。「ネイチャーセンターは人を育てる拠点だと思っています。この活動の積み重ねで50年後、100年後、ヤイロ鳥がもっと身近な存在になるように。その根底にある生態系への意識が広がっていくように、そう願っています。」



「ネイチャーセンター建設はまだほんの通過点。山に入ってもらってこそ意味がある。」

ネイチャーセンターは山の暮らしへの入り口



さて、そのネイチャーセンターの話になると、「どうも建物ができたことで、これが私たちの活動のゴールのように思われてしまった節があります。でも、それは違うんです。」とやや不満顔。その一方で、拠点がなかったが故の苦労も確かにあった。講習一つにしても場所を押さえるところから全てが始まっていた。ちょっとした道具を置く場所もなく、その段取りで肝心の講習の準備にまで手が廻らないという悩みがあったそうだ。「その意味ではもちろん一つのベースキャンプができたことは確か。でも、あくまでベースキャンプなんです。」中村さんはそう強調する。では、その先はどこへ続いているのか。

「その先は、山、そして尾根です。実際の山に行ってほしい。みなさんを尾根にお連れしたい。山はエネルギー生産の場でもあり、かつての尾根は『大畑』という名が示すように食料生産の場でもありました。山での暮らしの復活、それがこれからの目標です。ヤイロ鳥もクマタカも中腹より下が生活の場。棲み分けはできます。」

中村さんの描くゴールはまだ先にある。

四万十樵養成塾 受講生募集

日時 平成26年11月22日(土)～11月24日(月祝) 2泊3日
場所 高知県高岡郡津野町船戸 せいらんの里とその周辺の県有林
募集 20歳以上の健康な方10名程度

詳しくは当財団までお問い合わせください！



山の手入れに興味のある方、チェーンソー手帳取得をご希望される方、もちろん未経験の方も大歓迎！
チェーンソーの使い方や間伐の仕方を基礎からじっくり学ぶことができます。
マンツーマンの指導で安心・安全。
受講生にはチェーンソー手帳を発行します！
この機会に皆さん、是非チャレンジしてみませんか！